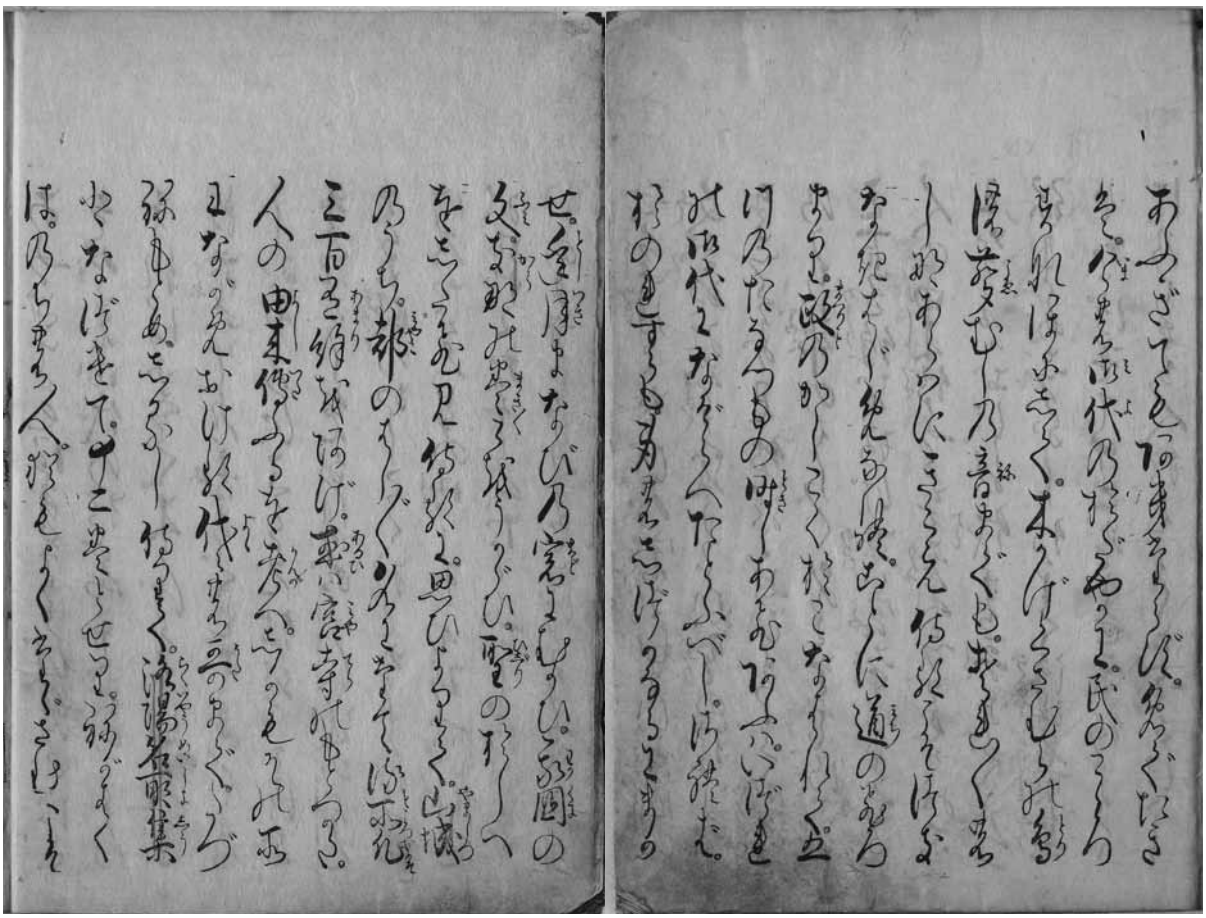
巻一「序」

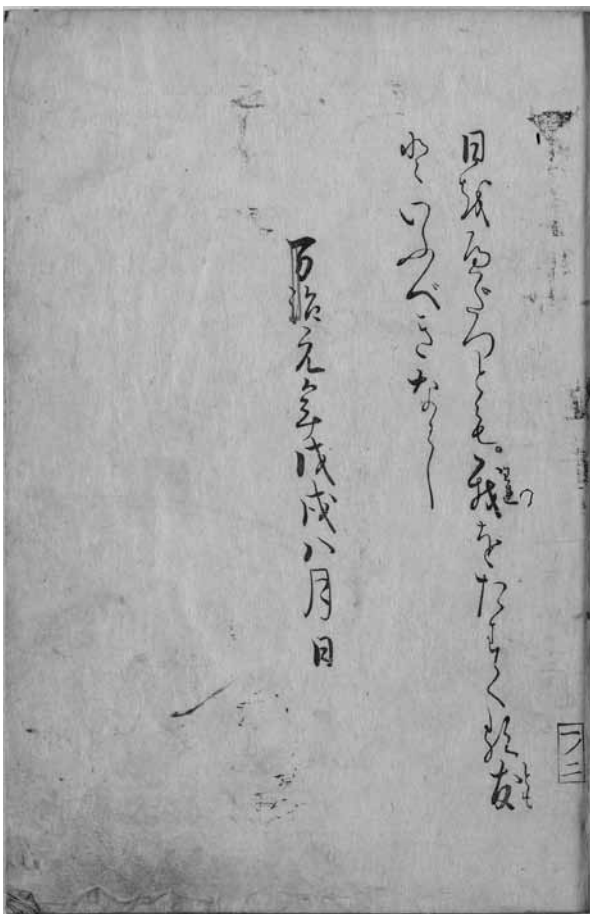


京都府立総合資料館蔵

巻一（序）

【原文】

あふぎてもあきたらず。めでたきは。今の御代のおだやかに。民のこゝろすなほにして。木かげくさむらの鳥の声むしの音までも。それくのしなあらはにきこえ侍るこそつきなきはじめなれ。ことに道のひろまり。政のかしこくおこなはれて。五つのたなつもの時しあひあふは。いづれの御代になぞらへたとふべし。されば。おのれすらも。身のしづかなるにまか（一オ）せ。年月まなびの窓にむかひ。我国の文。支那の巻々をうかゞひ。聖のおしへをしたひ見侍るに。思ひよりて。山城のうち。都のはしゞく名にたてる所凡三百有余をあげ。或は宮寺のもとつかた。人の由来伝ふるを考へ。しかもその所にながめおける代々の哥まで。たづねもとめ。しるし侍りて。洛陽名所集となづけて。十二巻とせり。ねがはくは。のちの人。猶もよくたゞさむこそ（一ウ）



京都府立総合資料館蔵

日をへだつとも。我をたすくる友

といふべきならし

万治元年戊戌八月日（二才）

【校訂本文】

仰ぎても飽き足らずめでたきは、今の御代（注1）の穏やかに、民の心素直にして、木陰・草むらの鳥の声、虫の音までも、それぞれの品（注2）あらはに聞こえ侍るこそ尽きなき初めなれ。殊に道の広まり、政のかしこく行はれて、五つの穀（注3）時し相会ふは、いづれの御代になぞらへ例ふべし。

されば、おのれすらも身の静かなるに任せ、年月学びの窓に向ひ、我国の文、支那の巻々を窺ひ、聖（注4）の教を慕ひ見侍るに、思ひ寄りて山城（注5）の内、都の端々名に立てる所凡そ三百有余を挙げ、或は宮・寺の本つ方、人の由来伝ふるを考へ、しかもその所に詠め置ける代々の歌まで尋ね求め、記し侍りて、『洛陽名所集』と名付けて、十二巻とせり。願はくば、後の人、猶もよく正さむこそ日を隔つとも、我を助くる友と言ふべきならし。

万治元年（注6）戊戌八月日

【注】

（1）天皇・将軍家の御治世。この当時は後西天皇、四代将軍徳川家綱の時代。
（2）種類、身分。鳥や虫までもが種としての本分に応じた役割を果たすことは、身分制社会における理想。
（3）五穀（米・麦・黍・粟・豆）。穀物の総称。
（4）徳の高い僧や儒者・仙人など。
（5）現在の京都府南部。
（6）一六五八年七月二三日に明暦から改元。

【現代語訳】

尊んでも尊び足りないほどすばらしいことは、今の御治世が平穏で、人々の心が素直であって、木陰や草むらにいる鳥の声や虫の音までもが各々の本分をはっきりと表していますことが限りない喜びの初めです。特に道理が広まり、政治が立派に行われて、五穀が豊穣でありますのは、これまでのどんな御治世にもなかったことです。

ですから、私のような者でさえも平穏な暮らしができますので、長年学問に励み、我が国の文章や中国の文献に親しみ、聖人の教えを読んでいましたところ、ふと思い付いて山城国内や京都のあちこちの名所約三百余りを選び、あるいは神社や仏寺の来歴、人物の由来などの伝承を考証し、しかもその場所で詠まれた歴代の歌まで探し求め、記して、『洛陽名所集』と名付けて、十二巻の書としました。願いますことには、後世の人がこの書の誤りを正してくれるなら、たとえ年月が経過していようとも、私を助けてくれる友人と言うべきでしょう。

万治元年戊戌八月日

（藤原英城）